

うちなあ点描  
第百九十六回

# 「琉球建築」への誘い

文・平良啓 Hironori Taira

世に知られた  
「琉球建築」

いわゆる「琉球建築」とは、沖縄県内に存在した古建築の総称である。主な種

類として、城郭建築・官殿建築・神社建築・仏寺建築・儒教建築・道教建築・住宅建築・橋・御嶽・墓などが挙げられる。琉球建築

は、日本建築や中国建築などの影響を受けつつも琉球の歴史や風土の中で発達した独特な建築として評価されている。

廃藩置県以降、沖縄（琉球）の歴史や民俗、建造物などに着目してこの地を訪れて調査し、記録を残した本土の研究者がいた。笹森儀助、鳥居龍藏、柳田国男、折口信夫、鎌倉芳太郎、伊東忠太、柳宗悦、田邊泰と助手の巖谷不二雄、阪谷良之進と柳田菊造、山崎正董、森政三などである。彼らと同行者が写した写真や文字記録は今となっては大変貴重である。ほかにも当時の沖縄の風景や人物、建造物などを写真に残した人々がいた。これらの資料は首里城をはじめ、県内の歴史的建造物の復元・修理に大いに活用されている。

## 建造物の普請と先人たちのパワー

ここで、規模の大きい歴史的建造物の幾つかに目を向けてみる。記録に残る長虹堤は那覇の海岸まで延々と約一キロメートルも築かれた。さらに、首里城から那覇港まで続いた真珠道は

石で舗装された約四キロメートルもある道路で、真玉橋は五連のアーチを持つ巨大な石橋であった。近世の首里城正殿は三階建てで約三百六十坪、柱の直径は四十センチ、長さは約八メートル。そして城内には数多くの建物があった。隣接する円覚寺境内にも多くの建物があり、中心となる仏殿は圧倒的な数の組物で構成され、内部には華やかな彩色が施されていた。各地に残る城郭もかなり大きな規模である。

これらの建造物の建設はほとんど人力による。土工事では大勢の人が鋏を使って土を掘ったであろう。石積工事では、岩山の筋目に鑿を打ち付けて石を割り、コツコツと加工し一個一個丁寧に積み上げている。また、石彫刻では、鑿などで精緻に彫り上げる一発勝負の作業で、失敗は許されない。木工事では、原木を山から切り出して、斧や手斧のこぎり、鑿、鉋、玄能などを使って柱や梁などを加工している。屋根瓦は、轆轤状の瓦用具に粘土を巻き付けて一枚ずつ作り上げ、焼成している。

しかし、古文書の記録によると、首里城の普請では比較的短期間で工事を行っており、驚きである。工種ごとの技術者集団が組織されて、普請奉行を中心に周到な準備を経た上で工事を進めている。建設機械のない時代に、職人たちは経験と実績、責任感、鋭い感性、時として自分の立場を懸けて工事に臨んでいたのである。歴史的建造物を観察すると、あらためて先人たちの個人能力の高さに感心させられる。

現代社会に生きるわれわれは機械に頼って生活している。建設現場でも同様で、ほとんどの機械がそろっている。そのことで工期短縮、施工精度の向上、安全性等が高まることは良いことだが、一方では手作りの味わいがなくなることや伝統的技術の喪失などが挙げられている。

ただし、現在の工事現場にも「モノ」にこだわる昔かたぎの職人はいるもので、現代工法と伝統的工法の共存を考えると、そこに一筋の光を見つけないと思う。

「琉球建築」(田邊泰著)所収の円覚寺仏殿。当写真はガラス乾板のプリント。原版は早稲田大学創造理工学部建築学科中川研究室所蔵

